異文化体験による日本人的心性の変容に関する研究

—主に対人不安意識をめぐって—

鶴田　洋子*・小川　捷之**

A Study of the Changes in Some Psychological Characteristics Peculiar to the Japanese People due to Cross-Cultural Experiences

— Focusing on Negative Self-Awareness in Interpersonal Relationships —

Yoko TSURUTA and Katsuyuki OGAWA

SUMMARY

It is often pointed out that negative self-awareness in interpersonal relationships is one of the major psychological characteristics peculiar to the Japanese. The purpose of this study is to discuss and clarify the following two hypotheses:

(1) That the experience of living abroad in a Western culture causes some change in one's negative self-awareness in interpersonal relationships. (Study I)

(2) That cultural adaptation (affiliation) styles have a certain relation to negative self-awareness in interpersonal relationships. (Study II)

A questionaire consisting of 66 questions (12 factors) related to negative self-awareness composed by Ogawa, et al. (1981) was given to 3 groups: Japanese university students who had studied abroad for more than 1 academic year and who had come back within the past 1 year (N=102); Japanese university students who were studying abroad at that time (N=11); Japanese university students who intended to study abroad in the near future (N=53). The countries where they went to study were the U.S.A., U.K., Australia and New Zealand, but mainly the U.S.A.

At the same time they were given another questionaire about their cross-cultural experiences that were categorized into 4 groups according to their cultural adaptation (affiliation) styles: pluralistic-bicultural style (P-B), monistic-xenophilic style (M-X), monistic-ethnocentric style (M-E) and cultural-nihilist style (C-N). 45 subjects from P-B and from M-X were selected for Study II.

In Study I the first hypothesis was investigated and discussed. The results were as follows:

(1) The score of negative self-awareness of the Japanese students after coming back to Japan was significantly lower than that before going abroad. It showed that before going abroad they used to worry about their interpersonal relationships more often than after they came back to Japan.

* 本学大学院教育学研究科 (Dept. of Psychology)
** 心理学教室 (Dept. of Psychology)

(2) The students who were studying abroad for 3-4 months had more negative self-awareness than they had in Japan. They were assumed to be confronted with the problems of "cultural shock."

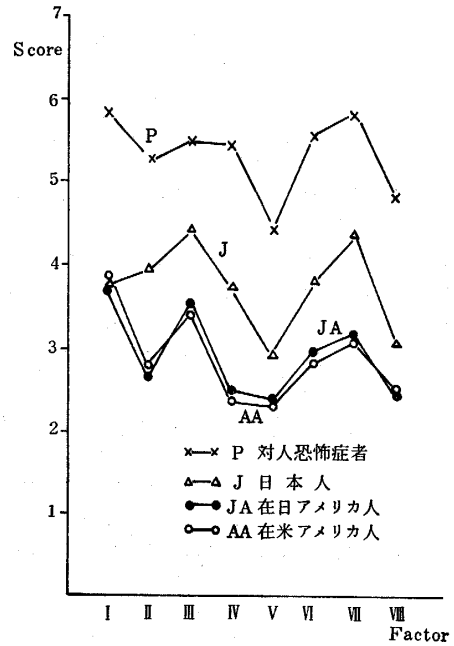
(3) Factor IV was the most changeable factor among the 12 factors; that is, whether the subjects exhibited a "worry of being overwhelmed by crowds of people." The score of this factor became significantly higher when studying abroad than before going abroad, and it became significantly lower after coming back to Japan. From these results the first hypothesis was considered to be supported.

In Study II the second hypothesis was discussed. As the result of comparing data in P-B with those in M-X it was shown that those who were more intimate and more affiliated with the Western culture than the Japanese culture had higher scores in negative selfawareness in interpersonal relationships than those who were affiliated with and adapted well to both cultures. Here the second hypothesis was also considered to be supported.

はじめに

日本人の対人関係については，多くの研究者らによって，様々な角度から調査や考察が行なわれており，その特有な行動パターンや心性等がいろいろと指摘されている（場の倫理，他者志向，甘え等)。中でも，欧米人と較べて，我々日本人は周囲や他人，状況を気にし，気をつかう度合いの大きいこと，そのため，他人を必要以上に意識したり，自らを否定的にとらえたりする傾向の著しいことはつとに指摘されているところである。そして，これらの心性は「対人恐怖」と呼ばれる神経症者に著しくみられることから，いわゆる，「対人恐怖的心性」としてとり上げられてきている。

小川らは，以下に示すように，この対人恐怖的心性に注目し，それを「対人不安意識



因子 No.	名称
I	多勢の人に圧倒される悩み
II	自分に満足できない悩み
III	気分が動揺する悩み
IV	うまく人とつきあえない悩み
V	気分のすぐれない悩み
VI	自分や他人が気になる悩み（身体的不調感）
VII	内気である悩み
VIII	目が気になる悩み

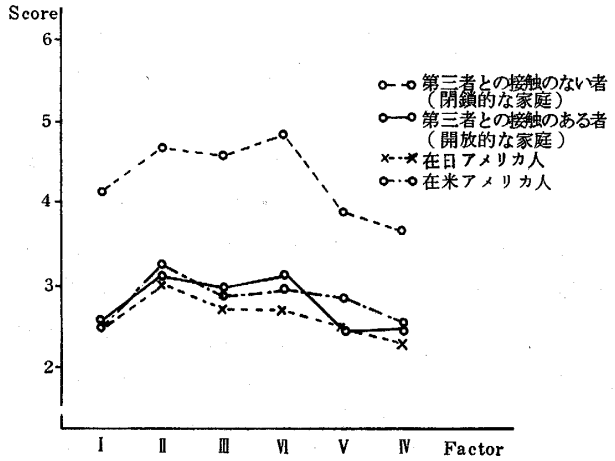
Fig. 1 対人不安意識(悩み)における因子別得点の比較—比較文化的視点から(小川ら，1979 a)

Negative Self-Awareness in Interpersonal Relationships」と考え，その構造を数量的に測定する試みを行なってきた。〔小川（1974），小川・林・永井・白石（1979a），小川・永井・白石・林（1979b），小川・木村・林（1980），林・小川（1981），林・小川（1982），白石・小川（1983）〕これらの中で，こうした意識がどのような背景から出現してきたのか，比較文化的側面から検討を加えた研究においては，対人恐怖症者の抱く対人意識は日本人一般に共感しうるものであり，欧米人と比較すると，日本人は症者でなくとも対人不安傾向が著しいことが報告されている〔小川・林・永井・白石（1979a），Fig. 1 参照〕。

Fig. 1 によると，日本人青年のもつ対人不安意識の様式は，欧米人と対人恐怖者のほぼ中間になっている。しかしながら，欧米人にはこれらの心性が全く理解されないわけではないこと，対人関係における緊張感・不安感は欧米人にも生起するものであるが，意識上に顕在化しにくい文化的背景，価値観にあるのではないかということ等も指摘されている。（このような心性に関する欧米人の研究としては，P. G. Zimbardo（1977）の著書，「Shyness」があげられる。その中に詳細に対人恐怖的心性というものがアメリカ社会的価値観の中で示されている。）

小川らはさらに，対人不安意識と幼少期の家庭環境との関連について比較文化的検討を行った〔小川・永井・白石・林（1979b），小川・木村・林（1980）〕。その結果，対人恐怖的な悩み，即ち，対人不安意識は，幼少期における第三者との接触頻度の少い者ほど高く，幼少期に対人関係の豊かな開放的な家庭に育った日本人の得点は，アメリカ人学生のそれと何らの差異がないこと，対人不安傾向の高い者は家族・自己に対して否定的イメージを抱くが，日米においてその質的差異は認められないものの，日本人にその程度がより著しいとされるのは，日本独特の対人関係のあり方（求心的家族機能など）や，言語的背景と関連するものと思われることが示唆されている（Fig. 2 参照）。

本研究では，これらの結果をふまえた上で，日本社会で生まれ育ち，従って，日本社会特有の心性や行動パターンを身につけている人々が，青年期以降，異文化と接触し，どの



因　子	名　　称
Ⅰ	〃集団に溶けこめない〃悩み
Ⅱ	〃気分が動揺する〃悩み
Ⅲ	〃自分や他人が気になる〃悩み
Ⅳ	〃ささいなことを気に病む〃悩み
Ⅴ	〃目が気になる〃悩み
Ⅵ	〃集中力のない〃悩み

Fig. 2　対人不安意識（悩み）における因子別得点の比較
—第三者の接触非接触の観点から（小川ら，1979 b，1980）

ような内的体験をするのか，どんな心的葛藤を経験するか，又，それらは特に対人恐怖的心性とどのように関連するかに視点を置き，日本人的な対人意識を検討した。

問　題　提　起

以上の問題意識のもとに，＜研究Ⅰ＞として，日本人青年（大学生）のもつ対人不安意識とともに，それが異文化を経験することによってどのように変化するか検討を試みた。ここでは留学という一つの異文化体験が自己の対人関係についてのイメージにどのような影響を及ぼすか数量的に検討することを目的とした。次に＜研究Ⅱ＞として文化的適応と対人不安意識の関連について検討した。

以下に仮説を記す。

仮説Ⅰ：異文化（英米圏西洋文化）体験によって，その日本的文化をよく反映するものとされる対人不安意識に何らかの影響がみられるであろう＜研究Ⅰ＞。

仮説Ⅱ：その個人のもつ文化的な適応の仕方・様式（各文化への親密度）の差異と対人不安意識との間には何らかの関連が認められるであろう＜研究Ⅱ＞。

方法と手続き

(1)　調査対象（日本人学生）は以下の3群とした。**A**群：海外（英米圏先進諸国）の大学・大学院に一年以上正規留学し，帰国後，約一年に満たない者（102名，平均年齢22.9才），**B**群：調査の時点（1984年秋）で留学中の者(11名，平均年齢21.7才)，**C**群：来年度(1985年秋）以降の留学予定・希望者（53名，平均年齢21.3才）である。3群とも，主として文部省による教員養成大学学部学生派遣制度，及び，或る私大の交換留学制度による正規留学生（又は予定者）であった。(注1)

(2)　彼らに郵送法で二種の質問紙，「対人関係質問票」〔林・小川（1981），付録資料1参照〕と，「異文化体験調査」〔本研究において筆者らが作成，付録資料2，3，4参照〕を施行した。

「対人関係質問票」は対人恐怖的心性（特に，その対人不安意識）に関して，その構造を数量的に測定することを目的に作成されたもので，66項目（12因子）からなり（Table 1参照），＜どちらともいえない（3）＞を中心とし，＜全然あてはまらない（0）～非常にあてはまる（6）＞の7段階評定で自己評定させるものである。「異文化体験調査票」は，近藤（1981），星野（1983），稲村（1980），小林（1981）らによる異文化適応に関す

注1）　対象となる日本人は日本で生まれ育った日本人青年とした。対象を大学・大学院の学生にしぼったのは年齢的にそれ以下（中学・高校生）の場合，対人不安意識が未分化であり，心身の発達途上にあって，安定性に欠け，調査等の信頼性も低いことが予想され，また，反対に，年齢があまり上であると，対人不安意識は安定しているが，文化的な適応の進み方が鈍化し，それらの影響を受けにくくなることが考えられるほかに，職業その他，その個人の条件の統制が困難になるからである。

る研究の中から，いくつかの文化適応に関する要因を拾い上げ，作成したものであり，属性頃目欄，文化的適応度をみるための複数の項目（渡航前に関して39項目，留学中に関して65項目，帰国後に関して36項目）及び自由記述欄からなる。これらすべてをあわせて，その個人の文化的適応度（各文化への親密性）を総合的に判断するものとした。今回，対象によって，A（帰国者用），B（留学者用），C（留学予定・希望者用）の3種を作成したが，内容的にはほぼ同じである。(注2)

Table 1　対人不安意識の因子（下位尺度）及びその項目番号(注3)

因　子	項目数	項　目　番　号
Ⅰ	7	1, 7, 13, 19, 25, 31, 37
Ⅱ	7	2, 8, 14, 20, 26, 32, 38
Ⅲ	7	3, 9, 15, 21, 27, 33, 39
Ⅳ	7	4, 10, 16, 22, 28, 34, 40
Ⅴ	7	5, 11, 17, 23, 29, 35, 41
Ⅵ	7	6, 12, 18, 24, 30, 36, 42
Ⅶ	4	43, 49, 55, 61
Ⅷ	4	44, 50, 56, 62
Ⅸ	4	45, 51, 57, 63
Ⅹ	4	46, 52, 58, 64
Ⅺ	4	47, 53, 59, 65
Ⅻ	4	48, 54, 60, 66

尚，「対人関係質問票」は，**A**群には留学前（A）・留学中（A′）・留学後の現在（A″）の3つの状況を，**B**群には留学前（B）・留学中の現在（B′）の2つの状況を，**C**群には留学する前の現在（C）の状況を，各々想定して回答するよう依頼した。

(3)　調査は，昭和59年，7月から11月下旬にかけてアンケート調査という形で行なわれ，方法としては主に郵送法によった。回収率は約62％であり，それから回答不十分なもの，むしろ英語を母国語とする帰国子女の回答など，本研究での目的に不適とみなされるもの

（注2）　文化適応に関する項目では，その要因として言語能力，文化的接触状況，生活状況（物理的環境，社会的環境，対人関係），渡航願望，帰国願望，再訪希望，カルチャー・ショック，リエントリー・ショック（復帰ショック），現地人観，日本人観，宗教性などを評定するように作成した。それぞれの項目によってその個人の文化適応度を判断する際の一つのめやすとした。

（注3）　各因子の名称は以下の通りである。Ⅰ：対人関係で緊張する悩み，Ⅱ：自分や他人が気になる悩み，Ⅲ：集団に溶込めない悩み，Ⅳ：大勢の人に圧倒される悩み，Ⅴ：自分に満足できない悩み，Ⅵ：気分が動揺する悩み，Ⅶ：くつろいで人と付合えない悩み，Ⅷ：ささいな事を気に病む悩み，Ⅸ：生きている充実感がない悩み，Ⅹ：気分のすぐれない悩み，Ⅺ：自分が気になる悩み，Ⅻ：変な人に思われる悩み。

を除いたものを分析の対象とした（計166名）。

A, B, C 3群とも留学生は米国が8割以上を占め，すべて独身であり，ほとんどの者が国や大学機関等の奨学金を支給されていた。専攻は，英語に関係のある分野（英語・英文学・英語教育等）が大半で，次いで，国際的視野に立つ社会科学（国際関係，国際法等），各種教科教育，教育・心理一般となっていた。留学動機は，勉学，外国(人)との交流，有意義な体験，語学の向上といったものが主であった。

A 群での留学期間は，1年間が大半（96.1%）を占めており，2年間（2.9%），3年間（1.0%）はごく僅かであった。そのうち，昭和58年に帰国した者は 35.3%，59年に帰国した者は 64.7% であった。B群の平均滞在期間は約4ヶ月弱であった。

結　　果

＜研究 I＞

ここでは仮説Iに関して検討した。まず「対人関係質問票」の施行により得られたデータを，Table 2 に示すように，**A** 群（帰国者），**B** 群（留学者），**C** 群（予定，希望者）からなる6種類のグループに分類した。各群での対人不安得点の因子ごとの平均目得点，及び，標準偏差は，Table 3 に示すとおりである。

Table 2　対人関係質問票により得られたデータの分類

	日本(留学前)	海外(留学中)	日本(留学後)
A 群（帰国者） N＝102（3：7）	3回目　施行 A	2回目　施行 A′	1回目　施行 A″（現在）
B 群（留学者） N＝11（6：5）	2回目　施行 B	1回目　施行 B′（現在）	
C 群（希望予定者） N＝53（5：5）	1回目　施行 C（現在）		

人数比（男性：女性）

A　：帰国者が留学する前の自分を振り返った時の対人不安意識（過去の自己イメージ）
A′：帰国者が留学中の自分を振り返った時の対人不安意識（過去の自己イメージ）
A″：帰国者の現在の対人不安意識（現在の自己イメージ）
B　：留学生が留学する前，日本にいた時の自分を振り返った時の対人不安意識（過去の自己イメージ）
B′：留学生の現在の対人不安意識（現在の自己イメージ）
C　：留学を予定，又は，希望する学生の現在の対人不安意識（現在の自己イメージ）

(1)　**A** 群（帰国者）での比較

＜A—A′—A″ 間での比較＞

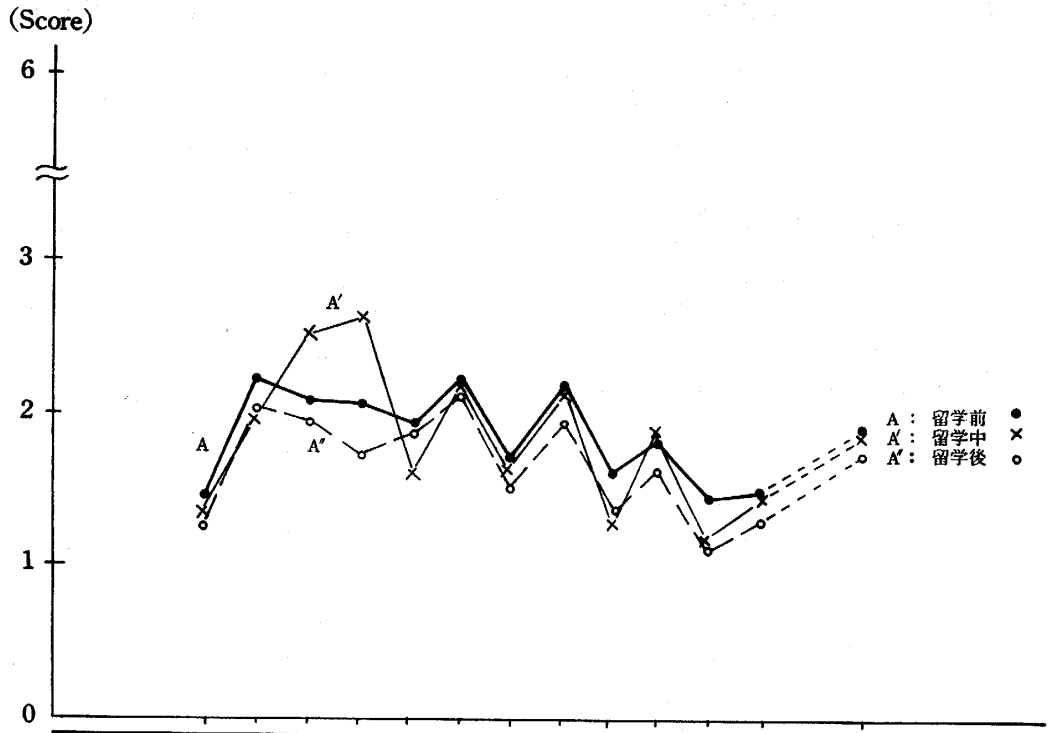
A 群において，留学前（A），留学中(A′)，留学後の現在（A″）の対人不安意識に変化がみられるかどうかを検討するために，A，A′，A″ の3群間において各因子（I～

Table 3　対人関係質問票の因子別平均項目得点（M）とその標準偏差（SD）(注4)
＜0～6の7段階評定＞

群	A (N=102)						B (N=11)				C (N=53)	
	A		A′		A″		B		B′		C	
因子	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
Ⅰ	1.47	0.98	1.37	0.84	1.25	0.81	0.90	0.66	0.95	0.76	1.58	0.70
Ⅱ	2.28	1.23	1.97	1.11	2.02	1.09	1.74	0.87	1.64	0.97	2.51	1.07
Ⅲ	2.13	1.30	2.56	1.14	1.98	1.21	1.71	1.30	2.47	1.35	2.02	1.05
Ⅳ	2.06	1.17	2.64	1.07	1.74	1.01	1.43	1.04	2.22	1.09	2.21	1.18
Ⅴ	1.93	1.20	1.62	1.03	1.89	1.07	1.47	0.86	1.78	0.57	2.24	0.99
Ⅵ	2.28	1.30	2.26	1.21	2.22	1.18	1.88	0.91	2.29	0.87	2.70	1.03
Ⅶ	1.73	1.08	1.65	1.01	1.46	0.95	1.14	0.86	1.48	0.98	2.01	0.90
Ⅷ	2.22	1.43	2.14	1.29	1.98	1.32	1.80	1.17	2.18	1.40	2.49	1.25
Ⅸ	1.61	1.25	1.27	0.95	1.38	0.96	0.95	0.72	1.20	0.61	1.52	0.09
Ⅹ	1.83	1.20	1.87	1.06	1.69	1.05	1.41	0.96	2.09	1.20	2.17	0.94
Ⅺ	1.45	1.03	1.19	0.80	1.17	0.84	1.16	1.14	1.43	1.21	1.60	1.07
Ⅻ	1.52	1.02	1.50	0.88	1.35	0.91	1.00	0.54	1.02	0.54	1.68	0.91
total	1.91	0.95	1.90	0.81	1.74	0.86	1.42	0.62	1.77	0.59	2.10	0.75

Ⅻ)，及び，総得点（T：対人不安得点）について，分散分析（乱塊法等）により3群間で平均値の有意差検定を行い，さらに，どの平均対の間に有意差があるかを調べるために多重比較（Ryan の法）を行った。その結果，Fig. 3 に示されるように，2因子（Ⅵ，Ⅹ）を除く，すべての因子及び総得点に有意差が認められた。又，多重比較では，A—A′ 間に6因子（Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ，Ⅴ，Ⅸ，Ⅺ），A′—A″ 間には4因子（Ⅲ，Ⅳ，Ⅴ，Ⅶ）と総得点に，そして，A″—A 間には7因子（Ⅰ，Ⅱ，Ⅳ，Ⅶ，Ⅷ，Ⅺ，Ⅻ）及び総得点に有意差が認められた。

（注4）　12因子の名称については（注3）を参照。



因子		I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII	総合得点(T)
F	A−A′−A″	*	**	**	**	**		**	**	**		**	**	**
多重比較 t	A−A′		*	**	**	**				**		*		
	A′−A″			**	**	**		*						*
	A″−A	*	*		**			*	*			*	*	*

(** P〈0.01　　* P〈0.05)

（注　便宜上，折れ線グラフを用いたが，これは12因子間相互の関係を表わすものではない。）

Fig. 3　A群における対人不安意識の因子別平均項目得点および有意差（N＝102）

(2)　B群（留学中の学生）での比較

＜B−B′ 間での比較＞

B群において，留学前（B）と留学中の現在（B′），それぞれの対人不安意識に変化が認められるかについて検討した。各因子ごと，及び，総得点において，両平均値間の有意差検定（t 検定）を行った結果，Fig. 4 に示す通り，2因子（IV，X），及び，総得点に有意差が見出され，3因子（VI，IX，XI）にその傾向（$p<0.1$）が認められた。

(3)　現在，それぞれ異なる状況にある3群（帰国者，留学者，予定・希望者）の比較

＜A″−B′−C 間での比較＞

(1)，(2) とも同一被験者に対し，同じ質問票を数回行って得た対応のあるデータ間の比較，即ち，過去の自己イメージと現在の自己イメージの比較であった。ここでは，現在，その状況にある者のデータ，即ち，A, B, C群の6種類のデータのうち，いずれも第1回目に施行し，しかも，現在の自分についての自己イメージで回答してもらった A″（帰国者），B′（留学者），C（留学前の者）のデータを用いて検討した。分散分析（一元配置法）

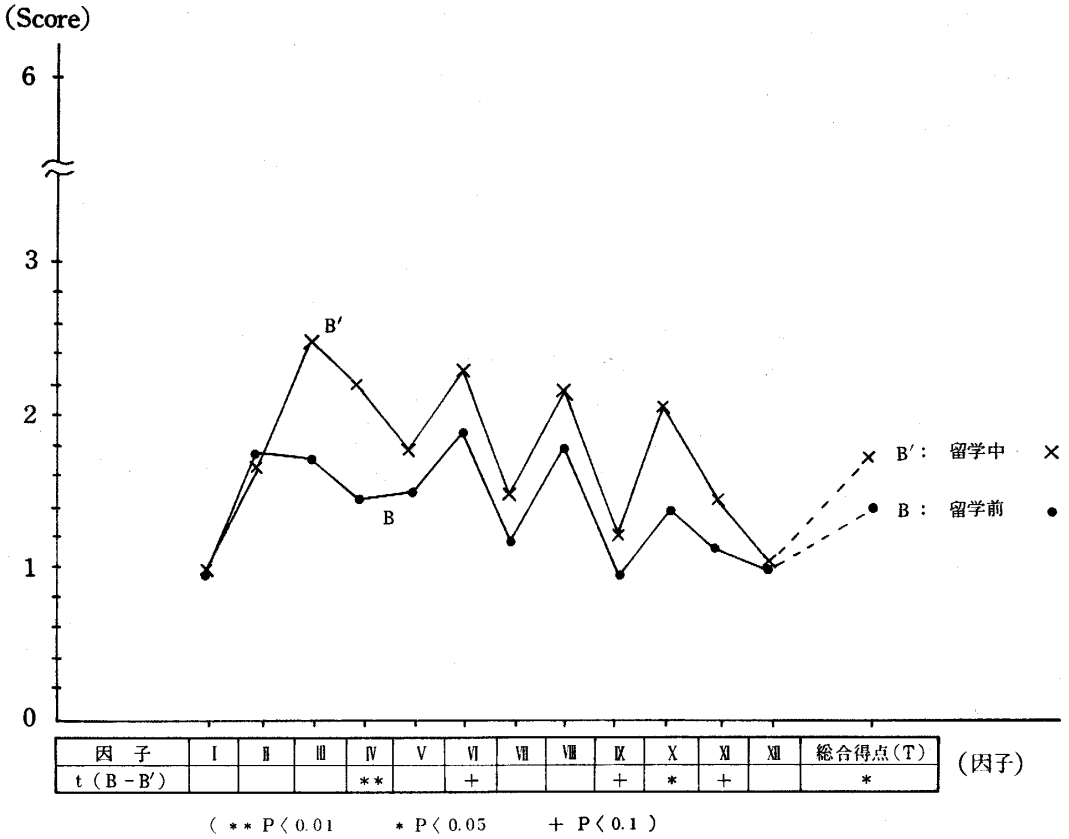
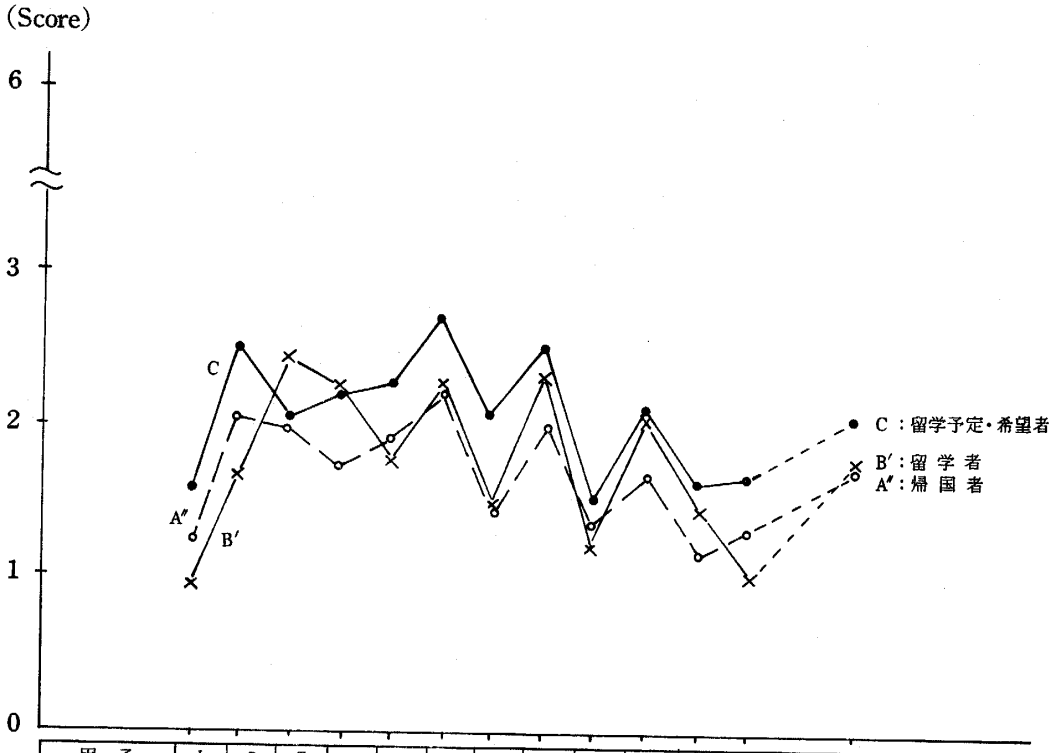


Fig. 4　**B** 群における対人不安意識の因子別平均項目得点と有意差 (N=11)

等の結果，6因子（I，II，IV，VI，X，XII）及び総得点に有意差が見出され，3因子（V，VIII，XI）にその傾向（$p<0.1$）が認められた。又，Ryan の法により，各平均値間の対比較を行った結果，A″—C 間において6因子（I，II，IV，VII，X，XI）及び総得点に有意差が認められた。これらは Fig. 5 に示された通りである。

(3) では，各々，留学前・留学中・留学後の者からなる3群間のデータ（対応なし）の分析結果を見てきたが，まず気づくことは，この (3) の結果と，(1) の結果，即ち，**A** 群内で同じ被験者が現在・留学中・留学前の自分を想定して回答したもの（対応のあるデータ）を比較して得られた結果との類似性である。両方に共通して，5因子（I，II，IV，VII，XI）及び総得点（対人不安得点）の平均値が留学後に比べ，留学前において有意に高くなっていた。さらに，2因子（VIII，XI）にも共通した傾向が認められた（$p<0.1$）。総じて，留学をまだ経験する前の群の方が留学から帰ってきた群（西洋文化との一定期間の接触があった）よりも，対人関係における悩みをより意識していることが (1) と (3) の双方のデータの分析結果から示された。これらは，**A** 群内の過去の自己イメージは，別段，誇張されていたり，ゆがめられたりしていないこと，(1) の分析結果において，得点の変動は単なる時間経過としての変化ではなくて，異文化接触という要因が強く浮かび上ってくること等を示唆するものと思われた。



因　子		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ	Ⅹ	Ⅺ	Ⅻ	総合得点(T)
F	C−B′−A″	*	**		*	+	*		+		*	+	*	**
多重比較	C − B′													
	B′− A″													
t	A″ − C	*	*		*			**			*	*		**

(** P〈0.01　* P〈0.05　+ P〈0.1)

Fig. 5　3群間における対人不安意識の因子別平均項目得点と有意差

(1), (2), (3) の分析結果に共通して，第Ⅳ因子（多熱の人に圧倒される悩み）は海外でより多く意識される悩みであることが示された。この因子は特に変動の度合いが大きいもので，文化的影響と関係の深いものではないかと思われた。

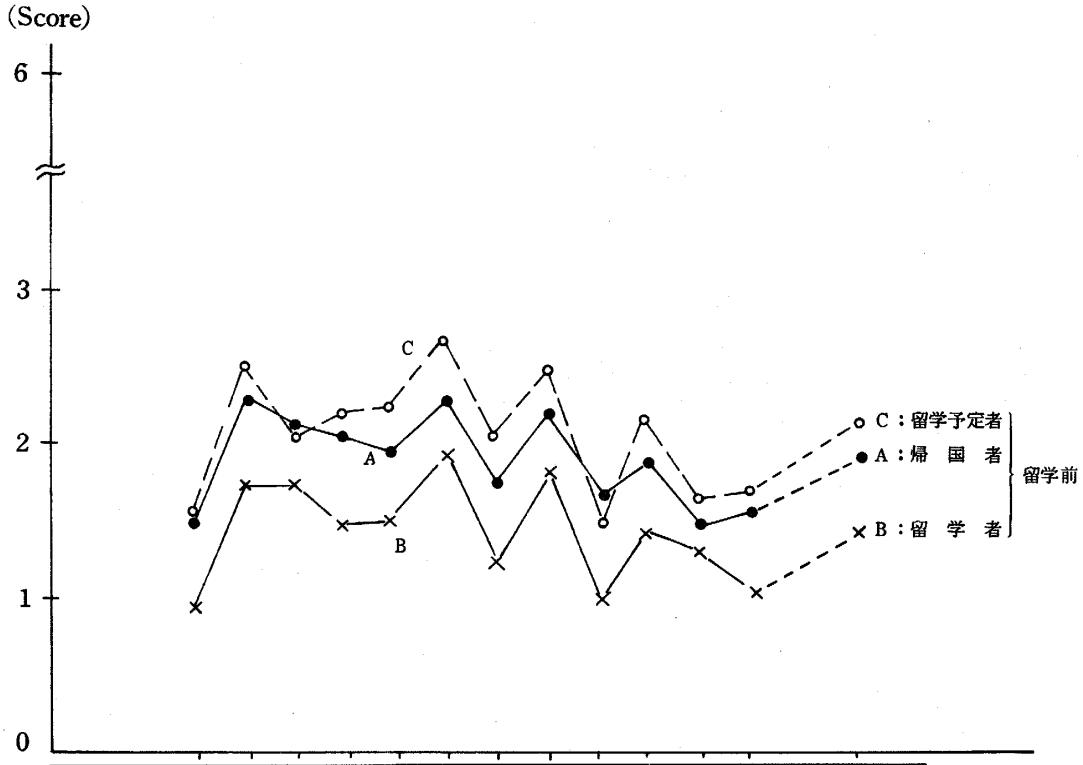
(2) では，海外（留学先）において，総じて対人不安意識ないしは神経症的傾向が大きくなっていることが示された。このような原因の一つとして，B群の被験者の滞在日数の少なさ，即ち，渡航して約3～4ケ月しか経過していない者が大半を占め，彼らは，まだ異文化への適応段階には入っておらず，カルチャー・ショック（文化的葛藤）の只中にいるのではないかということが考えられた。

(4)　同一状況に関する帰国者，留学者，留学予定・希望者の自己イメージの比較

過去の状況を振り返り，想定した場合の自己イメージと，現在，実際にそのような状況にある人のもつ自己イメージとの間にどのようなくい違いがあるか検討した。

＜A－B－C間での比較＞

自己評定を行った状況は3群とも留学前であるが，Aは現在留学を終えて帰国した者の過去（留学前）の自己イメージ，Bは現在留学して海外に在住している者の過去(留学前)



因　子		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ	Ⅹ	Ⅺ	Ⅻ	総合得点(T)
F	A-B-C	*				+	*	+			+			+
多重	A－B													
比較	B－C							*						
t	C－A							*						

(* P〈0.05　　+ P〈0.1)

Fig. 6　3群間における留学前の自己イメージの比較
(対人不安意識の因子別平均項目得点および有意差)

の自己イメージ，そして，Cは現在日本におり留学を予定・希望する者の現在（留学前）の自己イメージである。これら3群間で分散分析（一元配置法等），及び，多重比較を行い，有意差を検討した結果，Fig. 6 に示されるように有意差は3因子（Ⅰ，Ⅵ，Ⅶ）にのみ見出された。

<A′—B′ 間での比較>

自己評定を行った状況は，2群とも海外留学中の自分についてである。A′ は帰国者が過去の留学中の状況をふり返ってみた時の対人不安意識であり，B′ は，現在，留学の只中にいる者の対人不安意識である。これら2群間の有意差検定を行った結果 (Fig. 7)，有意差は全く見出されなかった。

ここでは，現在，その状況に実際にある人の対人不安意識（現在の自己イメージ）と，他の場所にあって，自分が過去にいたその状況を想定している人の対人不安意識（過去の自己イメージ）の間には，ほとんど差異のないことが示された。この結果は，留学帰りの人は，よく自分の留学中の過去を誇張したり歪曲したり，或は，ファンタジーによって美

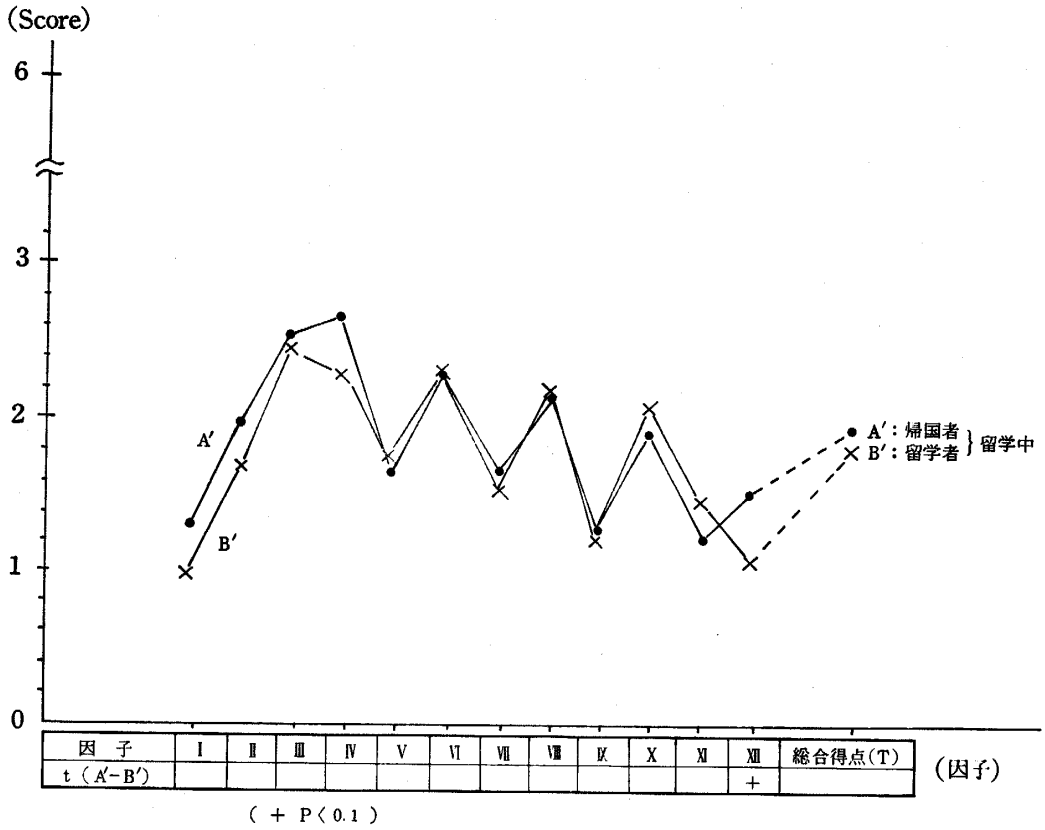


Fig. 7　2群間（A′—B′）における留学中の自己イメージの比較
（対人不安意識の因子別平均項目得点および有意差）

化したりしやすい等といった見方をされるが，こういった見方を覆すものである。また，ここで用いた「対人関係質問票」も，個人が主観的に自分を内省して自己評定するもので，ここで試みたように過去の留学中の自分をふり返って内省し，自己評定してもらったとしても，そこで測定される対人不安意識はあまり歪曲がないのではないかということが考えられる。

＜研究 II＞

ここでは仮説IIに関して検討する。まず，すべての被験者（総数166名）に施行した「異文化体験調査票」をチェックし，海外経験の全くない者（C 群から32名）を除き，これらの残り 134 名（すべて英米圏での短期旅行も含む海外経験のある者）に関して，その人の全体的な各文化への親密度を検討し，K. Kavanagh (1979) に従って，Table 4 に示す通り，次の 4 群に分類した。(注5)

次に，大多数を占める ①P—B群（両方の文化によく適応）と ②M—X群（西洋文化に偏って適合感をもつ）の中から，分類上の性質（各文化への親密度の差異）をより濃く

（注5）　分類にあたって調査票（個々人の異文化体験や文化適応に関する項目，自由記述など）により，個々人の全体的イメージをつかみ，それらに関して数名の異文化体験の豊富な者，文化比較及び異文化適応の研究者らと検討し，分類を行った。

Table 4　異文化への対処様式 (Kavanagh, K., 1979) によるデータの分類

Home Culture への親密さ ＼ Host Culture への親密さ	高い	低い
高い	① 多元的様式 pluralistic—bicultural style (P—B 群) 77名 (57.5%)	③ 一元的様式 monistic—ethnocentric style (M—E 群) 3名 (2.2%)
低い	② 一元的様式 monistic—xenophilic style (M—X 群) 47名 (35.1%)	④ 文化的ニヒリズム cultural—nihilist style (C—N 群) 7名 (5.2%)

↑ (小) 復帰ショック (大) ↓

← (大)　異文化適応　(小) →

* ここでいう Home Culture は日本文化，Host Culture は西洋（英語圏）文化とする。
①P－B群：日本文化，西洋文化，両方によく適応し問題の見られない者
②M－X群：西洋文化により適応し，日本文化へ不適応感を持つ者
③M－E群：日本文化により適応し，西洋文化へ不適応感を持つ者
④C－N群：日本文化にも，西洋文化にも，不適応感を持つ者

備えていると思われる順に，45名ずつ選び，これら2群間で仮説Ⅱ ＜文化的な適応度（各文化への親密度）と対人不安意識との関連性＞ について検討することにした。両群とも西洋文化への親密度の高さという点では一致しており，その違いは，日本社会・文化への親密度・適応感の差異である。ここでの比較で興味をひくのは ②M－X 群である。この群は，西洋文化社会へはよく適応し（親密度が高く），かつ，日本社会への適応感をあまりもたない者からなることから，日本的文化をよく反映するものとされる対人不安意識は彼らにあってはどのようなものであるのか，大変興味深く感じられた。尚，各群の内訳は，①P－B群（45名：**A** 群より37名，**B** 群より3名，**C** 群より5名，平均年令22.6才），②M－X群（45名：**A** 群より37名，**B** 群より2名，**C** 群より6名，平均年令22.2才）であり，どちらも男女比は3：7であった。

①，② 群共に，現在の時点での自己イメージについての回答を検討した。結果は，Table 5, Fig. 8 に示された通り，5因子（Ⅲ，Ⅶ，Ⅸ，Ⅹ，Ⅻ）及び総得点（T：対人不安得点）に有意差が認められ，第Ⅵ因子にその傾向（$p<0.1$）がみられた。

これらの結果から，②M－X群（西洋文化に強い適合感をもつ）は，①P－B群（両方の文化によく適応）よりも，総じて，対人不安傾向が高く，従って，より神経症的な傾向の大きいことが認められる。これらのことから，②M－X群において，彼らは，“西洋文化により親和的であり，高い価値観を持つが由に，日本的な付き合いを重視せず，又は，

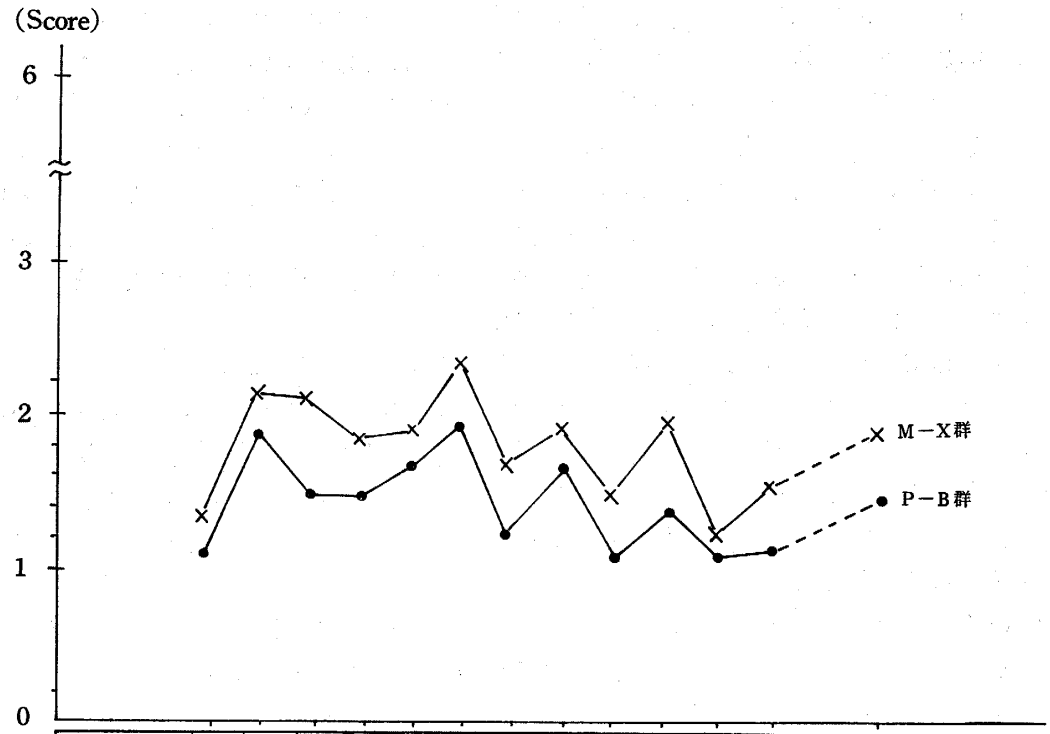
Table 5　対人関係質問票の因子別平均項目得点(M)とその標準偏差(SD)及び有意差(注6)
＜0～6の7段階評価＞

群 / 因子	P—B群 M	P—B群 SD	M—X群 M	M—X群 SD	t
Ⅰ	1.11	0.70	1.36	0.91	1.469
Ⅱ	1.83	0.97	2.14	1.23	1.315
Ⅲ	1.49	0.94	2.13	1.25	** 2.729
Ⅳ	1.48	0.85	1.81	1.18	1.516
Ⅴ	1.66	0.86	1.86	1.08	0.928
Ⅵ	1.97	0.98	2.37	1.12	+ 1.783
Ⅶ	1.22	0.84	1.66	0.93	* 2.316
Ⅷ	1.66	1.29	1.93	1.39	0.933
Ⅸ	1.05	0.66	1.53	0.94	** 2.748
Ⅹ	1.40	0.80	1.97	1.15	** 2.715
Ⅺ	1.03	0.81	1.24	0.90	1.155
Ⅻ	1.13	0.83	1.58	0.92	* 2.398
total	1.47	0.68	1.84	0.87	* 2.225

(**P＜0.01　*P＜0.05　＋P＜0.1)
P—B群：日本文化，西洋文化両方によく適応する者（45名）
M—X群：西洋文化により適応し，日本文化に不適応感を持つ者（45名）

全く気にもとめていない”というのではなくて，彼らにおいては，“日本的な対人関係の中で，より悩みや不適合感を強く持ち，それを意識しており，神経症的傾向が高くなっている”そして，それが由に，“日本文化よりはずっと増しであるといったように，自らを悩みから解放（逃避）するために，西洋への偏った適合意識をもっているのではないか”と考えられた。

（注6）　12因子の名称については（注3）を参照。



因　子	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ	Ⅹ	Ⅺ	Ⅻ	総合得点(T)
t(P·B-M·X)			**			+	*		**	**		*	*

(** P〈0.01　　* P〈0.05　　+ P〈0.1)

Fig. 8　2群間（P—B群とM—X群）における現在の自己イメージの比較
（対人不安意識の因子別平均項目得点および有意差）　（N＝45）

考察とまとめ

本研究は，対人不安意識と文化的要因の関連について検討するため，まず，研究Ⅰとして海外留学という一つの異文化体験に着目し，それによって，個人のもつ自己イメージとその中にみられる対人不安意識がどのように変容するかを調査したものである。被験者は，留学する前の人（**C**群），現在留学中で海外に在住している人（**B**群），そして，留学を終えて帰国した人（**A**群）とした。

研究Ⅰでは，仮説Ⅰ（異文化と接することにより，その対人不安意識には何らかの影響がみられるであろう）について，対人関係質問票及び，異文化体験調査票によって得られたデータ(注7)をもとに検討した。その結果は以下の通りであった。

①対人不安意識は，留学する前よりも帰国後において，総じて，有意に低くなってお

(注7)　ここで，考察を行う前に念頭に入れておくべきこととして，①全体的に因子得点が低いこと，即ち，<3. どちらともいえない>を中心とする<0～6>の7段階評定であるが，すべての因子別項目得点の平均値が<3>より下であったこと，②ここでは，あくまでも今回の研究という限られた範囲の中から得られた知見を述べること，即ち，今回の調査結果のみで，様々な要素が複雑に錯綜し合って成立している文化・風土について言及できることはごく僅かであることをあげておく。

り，このことは，帰国した者は，対人関係や自分自身についての悩みをあまり意識しなくなっていることである。即ち，神経症的傾向がより少なくなっていることを示す。これは，**A** 群内での対応のあるデータ間（A—A′—A″）の比較においても，また，**A, B, C** 群での異なる状況に現在ある人々から得られたデータ間（C—B′—A″）の比較においても認められている。従って，**A** 群内での変化の要因として，留学による異文化との接触という文化的影響の他に，時間的経過による発達的変化や過去のイメージの誇張や歪曲ということも考えられたのであるが，**A, B, C** 群間の比較でも同様の結果を得たことから文化的要因がより大きな影響力をもつことが示唆されている。

②留学して 3～4 ヶ月の者（**B** 群）は，留学以前よりも，総じて，対人不安傾向が高く，留学先で，対人関係での，或は，自分自身についての悩みをより多く意識していることが示された。「異文化体験調査票」の自由記述欄をみると，まだ渡航日数が浅く，言語の問題もさることながら，異文化への適応段階にはまだ入っておらず，様々な文化的葛藤を意識し，精神的に不安定な状態にあるものと思われる記述（カルチャー・ショックの体験など）も多く認められた。

③いくつかの比較検討の結果，共通したパターン（留学中，著しく増加するもの）で最も激しい変動をみせた因子は，第Ⅳ因子（多勢の人に圧倒される悩み）であり，これは，特に文化的影響を大きく受けるものと考えられる。この悩みは，多勢の人々を前にして経験される臨場不安（緊張感や圧迫感）とされているものであるが，これが留学中，著しく増大することから，留学生は海外という未知の環境において，全く自分一人で自らを制御しつつ生活していかねばならないというようなことを気負うあまりに，“多勢の未知の人達に対する卑小な自分”というものをより強く意識して（又は，苦にして）いるものと考えられた。興味深いのは，この因子は，先行研究〔小川・林・永井・白石（1979a)〕において，対人恐怖症という神経症的レベルにある人に特有の因子とされていることである。このことは，留学生が外国での生活において，かなりの精神的ストレス（恐らく神経症レベルに近いほどの）を持たされていることを示唆するものと思われる。調査票の自由記述欄にも，異国の中で，しかも，個人主義社会といわれる，個人の自由の代償として厳しく自らの責任や意志の問われる西洋社会において，初めて独立した一個人として自己を見つめざるを得ない状況におかれ，その中でたった一人でやっていかねばならないという自覚，気負い，不安感，心細さを示す記述も多くみられた。

④過去の状況（留学前や留学中）を振り返った時の自己イメージと，現在，その状況（留学前や留学中）の真只中にいる時の自己イメージとの間の比較において，ほとんど差異のみられなかったことから，留学経験者や留学中の者の述べる，かつて経験した自己イメージは，対人不安意識に関しては信頼できるもので，ゆがみ・誇張・ファンタジーとはいえないことが示唆された。これはまた，①で述べた，**A** 群内での比較の結果と **A, B, C** 群間での比較の結果の類似性の高さからも裏付けされている。以上のことから仮説Ⅰは支持されたといえる。

次に，研究Ⅱにおいては，仮説Ⅱ（個人の文化的適応度やその様式・スタイルと対人不安意識との間に何らかの関連があるであろう）の検討を目的として，日本人学生の日本及

び西洋への文化適応（社会適応）の仕方の違いについて，二種の質問紙から得られたデータをもとに検討を加えた。その結果，両方の文化によく適応するもの（①P—B群）よりも，西洋文化・社会によく適合し，日本社会に不適応感をもつもの（②M—X群）の方が，やはり，対人不安傾向が強いこと，即ち，神経症的傾向が高いことが認められ，このことから，彼ら（②M—X群）は，西洋一辺党でドライに人間関係を割り切っていたり，日本的な対人関係を軽んじていたりするなどというのではなくて，日本社会の中で，かなり強い不適応感や不満をもち，それを気にし，苦にしていること，そして，そこから解放されるため，西洋社会への親和性をより高く持つのではないかということが示唆された。自由記述欄では，M—X 群の帰国者の全員が，“日本にいてもあまり楽しくない。留学先の方が良かった”と記述している。以上，研究の頭初，考えられた仮説Ⅱも支持されたとみなすことができたと思われる。

最後に，本研究における問題点及び今後の検討課題について述べる。まず，被験者の特殊性のために，得られたデータ数が不均衡（特に留学中の学生が少数）となってしまったことが問題点としてあげられる。次に，使用した質問紙であるが，今回筆者らが作成した「異文化体験質問票」を用いた分類では，被験者から得られた膨大な量の自由記述も参考にし検討を加えたものであるが，主観に頼ったところもあり，分類上での妥当性・信頼性の検討は十分なものとは言い難い。属性項目，及び，複数の適応に関する項目は，これまでの異文化適応に関する先行研究を検討し作成したものではあるが，今後，数量化Ⅲ類などによって種々，吟味しなければならないと考えている。また，異文化体験に関する今回の研究に於いては，例えば帰国者の大半が1年間であり，留学者のほとんどが3～4ケ月間という短期間の滞在であったが，今後は，留学時の滞在期間をはじめ，帰国後の日数・年月など様々な場合を考慮に入れ，いわゆる個々人の適応の段階ごとに，縦断的方法などにより，対人不安意識の測定を試みていきたい。又，対人不安意識における性差については，先行研究〔林・小川(1981)〕において差異がほとんど見られなかったので，今回は特別な検討は行なわなかったが，今後は，文化適応における性差の問題とも関連させて検討していく必要があるだろう。

参 考 文 献

1) 林　洋一・小川捷之「対人不安意識尺度構成の試み」横浜国立大学保健管理センター年報 No. 1, 1981.
2) 林　洋一・小川捷之「対人意識尺度構成の試み —その2—」横浜国立大学・保健管理センター年報 No. 2, 1982.
3) 星野　命編「カルチャー・ショック」(現代のエスプル 161 号) 至文堂, 1980.
4) 稲村　博「日本人の海外不適応」日本放送出版協会, 1980.
5) 岩原信九郎「教育と心理のための推計学」日本文化科学社, 1965.
6) Kavanagh, K. *The Indo-Chinese Refugees in Hawaii*, Unpublished manuscript, University of Hawaii, 1979.
7) 小林哲也「海外子女教育・帰国子女教育—国際化時代の教育問題」有斐閣新書, 1981.
8) 近藤　裕「カルチュア・ショックの心理—異文化とつきあうために」創元社, 1981.
9) 小川捷之「いわゆる対人恐怖者における『悩み』の構造に関する研究」横浜国立大学教育紀要

14, 1974.
10) 小川捷之・林 洋一・永井 撤・白石秀人「対人恐怖症者に認められる対人不安意識に関する研究(1) 比較文化的視点から」横浜国立大学教育紀要 19, 1979 a.
11) 小川捷之・永井 撤・白石秀人・林 洋一「対人恐怖症者に認められる対人不安意識に関する研究(2) 地域性および幼少期における家族以外の成員との接触・非接触の観点から」横浜国立大学教育紀要 19, 1979 b.
12) 小川捷之・木村方美・林 洋一「対人恐怖症者に認められる対人不安意識に関する研究(3) 幼少期の家庭環境と自己像に関する比較文化的検討」横浜国立大学教育紀要 20, 1980.
13) 荻野恒一・星野 命編「カルチュア・ショックと日本人 —異文化対応の時代を生きる—」有斐閣選書, 1983.
14) Zimbardo, P. G. *Shyness*, Addison-Wesley Publishing Company, 1977.

付録資料 1

対人関係質問票（66項目）

1 つき合いの長い友人と話をする時も緊張がとれない。
2 先のことを考えすぎる。
3 集団の中に溶け込めない。
4 多勢の人がいると自分が圧倒されてしまうような感じがする。
5 根気がなく，何事も長続きしない。
6 感情的すぎる。

7 自分のことが皆に知られているような感じがして，思うようにふるまえない。
8 職場，学校のクラス，近所の人に自分がどのように思われているのか気になる。
9 グループでのつき合いが苦手である。
10 人がたくさんいるところでは気はずかしくて話せない。
11 ものごとに熱中できない。
12 気持が安定していない。

13 自分のことが他の人に知られるのではないかとよく気にする。
14 人と会う時に，自分の顔つきや目つきがその人に悪い印象を与えるのではないかと不安になることがある。
15 人との交際が苦手である。
16 多勢の人の中で向かい合って話すのが苦手である。
17 計画をたてても実行が伴わない。
18 気分が落ちつかない。

19 話をしている時に顔がこわばってイヤな表情になる。
20 人と会う時自分の顔つきが気になる。
21 人が多勢いると，うまく会話の中に入っていけない。
22 多勢の人の前へ行くと，足がふるえ胸がつまる。
23 意志が弱い。
24 気分がすぐに変る。

25 友達が自分を避けているような気がする。
26 自分が相手の人にイヤな感じを与えているように思ってしまう。
27 対人関係がぎこちない。
28 会議などの発言が困難である。
29 決断力がない。
30 すぐに気持がくじける。

31 むかい合って仕事をしている時，相手に顔を見られるのがつらい。
32 他人が自分をどのように思っているのかとても不安になる。
33 多人数の雰囲気に，なかなか溶け込めない。
34 人前に出るとオドオドしてしまう。
35 何をやるにも集中できない。
36 つまらないことをクヨクヨ考える。

37 知らない人より知っている人と会う時の方が緊張する。
38 自分が人に，どう見られているのかクヨクヨ考えてしまう。
39 仲間の中に溶け込めない。
40 人前でぎこちない自分をさらけ出すのがつらい。
41 ひとつのことに集中できない。
42 すぐまごついたりとまどったりする。

43 人と自然につき合えない。
44 小心である。
45 将来の自分には，あまり期待が持てない。
46 いつも頭が重い。
47 人の目を見るのがとてもつらい。
48 自分は，まわりから変な人に思われているようだ。

49 知っている人を見かけても，顔を合せないように道をさけてしまう。
50 気が弱い。
51 生きていることに価値が見いだせない。
52 いつも疲れているような感じがする。
53 顔をジーッと見られるのがつらい。
54 自分のおかしいことが人に知られて，家の者に迷惑をかけているのではないかと気になる。

55 友達と一緒にいるとき顔がこわばったり，赤くなったり，緊張したりする。
56 内気である。
57 充実して，生きている感じがしない。
58 気分が沈んでしまって，やりきれなくなる時がある。
59 人と目を合わせていられない。
60 相手に，イヤな感じを与えるような気がして，相手の顔色をうかがってしまう。

61 二人きりでいると，相手を意識してしまって緊張してしまう。
62 引っ込み思案である。
63 何をやっても，うまくいかない気がする。
64 みじめな思いをすることが多い。
65 人と話をする時，目をどこへもっていっていいか，わからない。
66 知らない人からジロジロ見られていると感じたことがよくある。

付録資料 2

異文化体験調査票A

1. 下の欄に、あなたの性別、年令、所属、専攻、留学、及び以前の海外経験などについて記入して下さい。

性別		年令		所属	
最終学歴					
専攻	留学前: 留学中: 帰国後:				
留学について	留学先:(国名) (学校名) 大学・大学院 学部 専攻 滞在期間: 年 月 ～ 年 月 (満 才) (満 才) 滞在目的: 奨学金: 無・有(奨学金)				
以前の海外経験(観光旅行も含む):					

2. あなたが留学を希望するようになった理由やきっかけ、又は目的を出来るだけ詳しく書いて下さい。

3. 留学する前のあなたについて、下から当てはまると思うものに、○をつけて下さい。(幾つでも可)

( )海外旅行をしたことがある
( )外国への関心が幼い頃から高かった
( )クリスチャンであった
( )英語は総じて得意だった
( )幼い頃海外に居た
( )外国人の友達がいた
( )教会へ行っていた(行ったことがある)
( )英語が好きであった
( )英語が上手にしゃべれるようになりたかった
( )英語の読み書きは苦手だった
( )家族、親戚で海外に住む者がいる(いた)
( )日本(日本人)は、好きだった
( )外国(外国人)は好きだった
( )日本的な付合いは楽しかった
( )日本文化をよく知っていた方だと思う
( )自己主張はスムーズにできた
( )消極的で内気な方だった
( )洋書や英文雑誌、英字新聞を良く読んでいた
( )ほとんど不自由なく英語で意見を伝えることができた
( )外国人との付き合いがあった(個人的に・家族が)
( )家族、親戚に他国籍の者、又は国際結婚をした者がいる
( )家族、親戚、知人に留学した(している)人がいる
( )幼い頃、家に近親者以外の人たちがよく出入りしていた
( )日本的な付き合いを煩わしいと思ったことがある
( )英会話は苦手だった
( )ヒアリングは苦手だった
( )友人が海外に住んでいる(住んでいた)
( )日本(日本人)は嫌いだと思った
( )外国(外国人)は嫌いだと思った
( )外国文化によく接していたと思う
( )留学経験が既にある
( )積極的で活動的な方だった
( )集団志向であった
( )個人志向であった

4. 留学中のあなたについて、下から当てはまると思うものに、○をつけて下さい。(幾つでも可)

( )良い環境で勉強出来た
( )東洋系(日本人以外)の人たちと親しかった
( )現地の一般の学生達と親しかった
( )日本人の同居者がいた
( )なかなか思うような成績が取れずに困った
( )成績にはあまりこだわらなかった
( )寮生活をしていた
( )ホームステイをした
( )留学先の人々は冷たいと思った
( )いろいろと悩みが多かった
( )英語には初めから殆ど困らなかった
( )英語を読むのに苦労した
( )英語に苦労したのは初めのうちだけである
( )日本より留学先の国の方が楽しいと思った
( )日本人はShyだと思う
( )どちらかといえば、ひきこもりがちであった
( )パーティで外国人と良く話をした
( )日本人同士で付き合うことが多かった
( )家族と一緒に滞在していた
( )外国人の同居者がいた
( )成績は良かった
( )自分の成績にまあまあ満足していた
( )アパート(一軒家)を借りた
( )留学先の国の人々は親切だと思った
( )留学は総じて楽しかった
( )相談相手はいた
( )英会話、ヒアリングに苦労した
( )英語を書くのに苦労した
( )日本に早く帰りたいとしばしば思った
( )もっと長い期間留学していたいと思った
( )毎日があまり楽しくなかった
( )毎日が楽しかった

付録資料 2 （続き）

( )日本に帰りたいと思ったことが一度はある
( )一度も日本に帰りたいと思ったことはない
( )比較的、適応するのが早いほうだと思った
( )自分について顧みる機会となった
( )仕事、勉強が楽しく充実していた
( )教会によく行った
( )時々無性に日本(日本語)が懐かしくなった
( )英文雑誌、新聞、洋書をよく読んだ
( )留学したがあまり意味は無いように思った
( )金銭面など経済的に困ったことがあった
( )外国人と良く映画、旅行、スポーツなどを楽しんだ
( )比較的、留学先の国の人々との付き合いが多かった
( )国籍を問わず留学生同士の付き合いが多かった
( )留学先で恋人(ＢＦ・ＧＦ)が出来た(日本人・外国人)
( )留学先の国の人々は日本人より自己中心的だと思った
( )留学して、いわゆるカルチャーショック(生活、行動パターンなどの違いにとまどいを感じたり、悩んだりすることなど)を受けた
( )現地学生の方が、一般の日本の学生より勉強していると思った
( )留学先の国では自己主張がより自由に出来て良いと思った
( )日本にいた時より、Activeな生活を送っていた
( )研究に忙しく、あまり人と付き合う暇が無かった
( )日本にいた時より、研究、勉強に熱心であった
( )日本にいた時より、自分の性格、考えていることが明らかになった
( )食事に困った(口に合わなかった
( )生活に大体において満足していた
( )生活に不満があった
( )くよくよすることがよくあった
( )寂しく思うことがよくあった
( )仕事、勉強がなかなかはかどらなかった
( )クリスチャンになった
( )涙もろくなった
( )留学して良かったと思った
( )カウンセラーと会って相談した
( )体型、容貌の違いが気になった

5. 留学中、あなたが思ったこと、感じたこと、不満、悩み、問題点、良かったこと等、何でも書いてください。

6. 日本に帰国したあなたについて、下から当てはまると思うものに○をつけて下さい。

( )日本に帰って、ほっとしている
( )もう二度と海外へは行きたくない
( )再び、留学した国へ行きたい
( )日本が一番良いと思う
( )後輩で同じ所へ留学するものがいたら薦める
( )自分はつくづく日本人だと思う
( )和食党である
( )洋食党である
( )食事には別にこだわらない
( )留学先の方が良かった
( )留学してとても良かったと思う
( )日本での毎日が楽しい
( )自分の物の見方が変わったように思う
( )留学先での生活の方が楽しかった
( )日本での毎日があまり楽しくないように思う
( )日本文化への興味が大きくなった
( )自分は日本文化をもっと知るべきだと思う
( )文化交流に興味がある
( )国を問わず、再び、海外へ行きたい(希望国名:)
( )海外へ行くことに関しては、あまり気がすすまない
( )同じ場所、又は同じ国へは行きたいとは思わないが、他の国、場所へなら行ってみたい
( )留学してもあまり得たものは無かったように思う
( )帰国後、いわゆる、カルチャー・ショックを受けたように思う
( )日本的な付き合いを意識したり、戸惑いや、ぎこちなさ等を感じることがある
( )日本と外国との違いを意識したり、比較した目で見ることが多いと思う
( )出来れば、国際交流や、英語、外国との関係のある仕事につきたい
( )別に、仕事にはこだわらない
( )周囲の人達から次のように言われたことがある(○で囲んで下さい: 元気になった・おしゃべりになった・強くなった・物事をはっきり言う・生き生きしている・大人になった・あまり変わらない・積極的になった・変わった)

7. 日本に帰国して、現在、あなたが思うこと、感じること、不満、悩み、問題点、良かったこと等、何でも記入して下さい。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

付録資料 3

異文化体験調査票B

1. 下の欄にあなたの性別、年令、所属、専攻、留学、及び以前の海外経験などに関して記入して下さい。

性別		年令		所属	
最終学歴					
専攻	日本での: 留学中:				
留学について	留学先: 国 大学・大学院 奨学金: 無・有(奨学金) 滞在期間: 年 月～ 年 月 (満 歳) (予 定) 滞在目的:				
以前の海外経験					

2. あなたが留学を希望するようになった理由やきっかけ、または目的を、出来るだけ詳しく書いて下さい。

3. 留学する前のあなたについて、下から当てはまると思うものに、○をつけて下さい。(いくつでも可)

( )海外旅行をしたことがある
( )外国への関心が幼い頃より高かった
( )クリスチャンであった
( )英語は総じて得意だった
( )英語の読み書きは苦手だった
( )家族・親戚で海外に住むものがいる(いた)
( )幼い頃海外に居た
( )外国人の友達がいた
( )教会へ行っていた(行ったことがある)
( )英会話は苦手だった
( )ヒアリングは苦手だった
( )友人が海外に住んでいる(いた)
( )日本文化をよく知っていた方だと思う
( )日本(日本人)は好きだった
( )外国(外国人)は好きだった
( )日本的な付き合いは楽しかった
( )留学経験が既にある
( )積極的で活動的な方だった
( )英語が上手にしゃべれるようになりたかった
( )洋書や英文雑誌・英字新聞を良く読んでいた
( )ほとんど不自由なく英語で意見を伝えることができた
( )外国人との付き合いがあった(個人的・家族が)
( )家族・親戚に他国籍のもの、又は国際結婚をしたものがいる
( )家族・親戚・知人に留学した(している)人がいる
( )幼い頃、家に近親者以外の人たちがよく出入りしていた
( )日本的な付き合いを煩わしいと思ったことがある
( )英語が好きであった
( )日本(日本人)は嫌いだと思った
( )外国(外国人)は嫌いだと思った
( )外国文化に良く接していたと思う
( )自己主張はスムーズにできた
( )消極的で内気な方だった
( )個人志向であった
( )集団志向であった

4. 留学中のあなたについて、下から当てはまると思うものに、○をつけて下さい。(幾つでも可)

( )良い環境で勉強出来る
( )パーティで外国人とよく話す
( )国籍を問わず留学生同士の付き合いが多い
( )東洋系(日本人以外)の人たちと親しい
( )家族と一緒に滞在している
( )外国人の同居者がいる
( )なかなか思うような成績が取れず困っている
( )寮生活をしている
( )ホームステイをしている
( )留学先の人々は冷たい
( )留学先の国の人々は日本人より自己中心的だ
( )悩みが多い
( )英語に関しては初めから殆ど困らなかった
( )英語を書くのに苦労している
( )日本に早く帰りたいと思う
( )日本より留学先の国の方が楽しい
( )研究に忙しく、あまり人と付き合う暇がない
( )英語に苦労したのは初めのうちだけである
( )生活に不満がある
( )比較的、留学先の国の人々との付き合いが多い
( )日本人同士で付き合うことが多い
( )現地の一般の学生たちと親しい
( )日本人の同居者がいる
( )成績が良い
( )成績にはこだわらない
( )アパート(一軒家)を借りている
( )留学先の国の人々は親切だ
( )食事に困る(口に合わない)
( )留学は総じて楽しい
( )相談相手がいる
( )英会話・ヒアリングに苦労している
( )英語を読むのに苦労する
( )もっと長い期間留学していたいと思う
( )日本人はＳＨＹだと思う
( )ひきこもりがちである
( )自分の成績にまあまあ満足である

付録資料 3 （続き）

( )留学したがあまり意味が無いように思う
( )日本にいた時より研究・勉強に熱心である
( )一度は日本に帰りたいと思ったことがある
( )一度も日本に帰りたいと思ったことはない
( )毎日があまり楽しくない
( )カウンセラーと会って相談したことがある
( )寂しく思うことがよくある
( )仕事、勉強が楽しく充実している
( )クリスチャンになった
( )英文雑誌・新聞・洋書をよく読む
( )金銭面など、経済的に困ったことがある
( )いわゆるカルチャー・ショック(文化、生活様式の違いにとまどったり、悩んだりすること、等)を受けた
( )外国人と良く映画・旅行・スポーツなどを楽しんでいる
( )留学先で恋人(ＢＦ・ＧＦ)が出来た(日本人・外国人)
( )アメリカでは自己主張が自由に出来て良いと思う
( )日本に居たときより、Activeな生活を送っている
( )日本にいた時より、自分の性格、考えていることが明らかになった
( )涙もろくなった
( )比較的、適応するのが早いほうだ
( )自分について顧みる機会となっている
( )毎日が楽しい
( )生活に、大体において満足している
( )くよくよすることがよくある
( )仕事、勉強がなかなかはかどらない
( )教会によく行く
( )時々無性に日本(日本語)が懐かしくなる
( )留学して良かったと思う
( )体型、容貌の違いを気にしてしまう
( )現地学生の方が、一般の日本の学生より勉強している

5. 留学して、あなたが思うこと、感じること、不満、悩み、問題点、良かったことなど、何でも書いて下さい。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

付録資料 4

異文化体験調査票C

1. 下の欄にあなたの性別、年令、所属、専攻、留学、及び以前の海外経験などに関して記入して下さい。

性別		年令		所属	
最終学歴					
専攻	日本での: 留学中:				
留学について	留学先: 国 大学・大学院 奨学金:無・有(奨学金) 滞在期間: 年 月～ 年 月 (満 歳) (予 定) 滞在目的:				
以前の海外経験					

2. あなたが留学を希望するようになった理由やきっかけ、または目的を、出来るだけ詳しく書いて下さい。

3. 留学する前のあなたについて、下から当てはまると思うものに、○をつけて下さい。(いくつでも可)

( )海外旅行をしたことがある
( )外国への関心が幼い頃より高かった
( )クリスチャンである
( )英語は総じて得意
( )英語の読み書きは苦手
( )家族・親戚で海外に住むものがいる(いた)
( )幼い頃海外に居た
( )外国人の友達がいる
( )教会へ行っている(行ったことがある)
( )英会話は苦手
( )ヒアリングは苦手
( )友人が海外に住んでいる(いた)
( )日本(日本人)は好き
( )外国(外国人)は好き
( )日本的な付き合いは楽しい
( )留学経験が既にある
( )積極的で活動的な方
( )英語が上手にしゃべれるようになりたい
( )洋書や英文雑誌・英字新聞を良く読んでいる
( )日本(日本人)は嫌い
( )外国(外国人)は嫌い
( )外国文化に良く接していると思う
( )自己主張はスムーズにできる
( )消極的で内気な方
( )個人志向
( )集団志向
( )ほとんど不自由なく英語で意見を伝えることができる
( )外国人との付き合いがある(個人的・家族が)
( )家族・親戚に他国籍のもの、又は国際結婚をしたものがいる
( )家族・親戚・知人に留学した(している)人がいる
( )幼い頃、家に近親者以外の人たちがよく出入りしていた
( )日本的な付き合いを煩わしいと思ったことがある
( )英語が好きである
( )日本文化をよく知っている方だと思う

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊